エヴリTシャツテルズアストーリー

家の中ではTシャツ、外出するときはエリのあるシャツという「TPO」は、いつごろまで常識だったのだろうか。いまでは家の中では無地のTシャツ、ここぞというときはお気に入りの絵柄のTシャツというひとが少なくないはず。下着から勝負服へ——20世紀後半から21世紀にかけてもっとも地位が向上した衣服は、Tシャツだったのかもしれない。

妙なTシャツを着ているひとがいると、気になってしかたがない。ふつうのファッションは値段が高かったり、有名ブランドだったり、だれが見ても「ヨシ」とされるものがリスペクトされるわけだが、Tシャツだけは「だれも見たことないもの」や、ヨシなのかダメなのか判断に迷うほうがリスペクトされたりする。人間が着るもので、Tシャツだけはもしかしたら判断基準が異なるのだろうか。それはそのまま、アートの判断基準でもあるけれど。

いつごろからか、「ヨシなのかダメなのか判断に迷う」Tシャツには、着用する本人の確固たる意志や、根拠のない自信や、なによりも個人的な記憶が染みついていることが多々あるのに気がついた。それがこの『捨てられないTシャツ』コレクションの始まりである。自分の週刊メールマガジンの連載で、どれくらい続けられるかもわからないままスタートしたのが、毎週締め切りギリギリで回を重ねていくうちに、気がついたら1年半たっていた。アイロン掛けだけは少しうまくなった気がする。

最初のうちはTシャツにまつわる思い出を持主から聞いて、それに略歴を加えてこちらで短い文章にしていた。そのうちに持主自身に書いてもらうのもおもしろいかもと思い始め、「書いてもいいよ」と言ってくれるひとには「てきとうにメモでくれたら、こっちできれいにしますから」とお願いするようになった。最終的には本書に登場するTシャツ70枚のうち、半分以上は持主自身による文章である。

年齢、性別、職業だけで名前は最初から出さなかったが、もしかしたらおわかりのとおり、中にはずいぶん有名なひとや、文章のプロも混じっている。でも9割方は名もない一般人で、他人に読ませるきちんとした文章を書いた経験なんてないひとたちだった。だからワードで書いてメールに添付などというのは少数派で、メール本文にそのまま書いてあったり、FacebookやTwitterのダイレクトメッセージにざーっっっと書き連ねてくれたひとが少なくない。

それはつまり、スマホで書いたってことだ。そうやって送られてきた「シロウトのテキスト」が、ほとんど直すところのない完璧な文章ばかりだった。文章のプロではないひとたちが、スマホで打ちこんで、これだけ読みごたえのある文章を書ける時代になっていることにまず驚いたし、文筆業で生計を立てている自分としては怖くもあった。

連載開始当初はTシャツの写真にごく短いテキストが添えられている、長いメルマガの箸休めみたいなコーナーだったが（『ROADSIDERS' weekly』は長さだけは日本有数の有料週刊メルマガである）、回を追うごとに文章はどんどん長くなっていき、時には短編小説サイズになった。内容も略歴とTシャツ話が半々ぐらいだったのが、文章が長くなるにつれてバランスが大きく崩れ、これまでの人生を１００行で語って、そのあとTシャツ話が3行……なんてことになっていった（それぞれの話で言葉遣いや表記が異なっているのも、書いてもらった文章をなるべくそのまま使いたかったからで、ご容赦いただきたい）。

『捨てられないTシャツ』という趣旨から言えば、それは破綻に他ならないし、一般の雑誌連載では許されないだろうが、予想もしなかったそんな展開が、僕にはすごくうれしくもあった。これまで作ってきた本のすべてがそうだったように、「やってるうちに、思いもしない方向にどんどん加速していく」企画こそが、ほんとうにおもしろい結果を生むから。

確固たる構想も立派なコンセプトも、むろん市場調査もなく始まったTシャツ物語が、回を追うごとに「箸休め」どころではないボリュームになるにつれて、少しずつ、僕の中である思いが膨らんでいった――「これはもしかしたら、Tシャツという触媒から生まれた『ナショナル・ストーリー・プロジェクト』なのかもしれない」という。『ナショナル・ストーリー・プロジェクト』はアメリカの小説家ポール・オースターが、公共放送局ＮＰＲで自身が語り手となったラジオ番組の採録集だ（原題『Thought My Father Was God』。ラジオ局では当初、オースターが自分の物語を語る番組を依頼したのだが、とてもそのような余裕がないと断ろうとしたところ、「番組を聞いているひとたちに物語を送ってもらって、あなたが読めばいいのよ」という妻の助言に従って、この番組が始まったのだという。

「私たちは、物語を求めているのです」と、オースターはリスナーたちに呼びかけた。「物語は事実でなくてはなりません。短くなくてはなりません。ただし、内容やスタイルに関しては、なんの制限もありません」。オースターは全米に、新鮮なままのリアリティの断片を求めたのだ。それは「世界とはこういうものだという私たちの予想を覆してくれる物語」であり、「作り話のように聞こえる実話」だった。

１年間の放送で４０００通を超える投稿が寄せられ、番組ではほんの一部が読まれただけだったが、そのまま捨て去られるには惜しい物語が本のかたちにまとめられて、たしか同時多発テロの直後に発売された。偶然、アメリカの田舎町の書店でそれを見つけた僕は、投稿された文章がみな短くシンプルな英語だったことも助かって、旅のあいだじゅう読み耽って、好きなエピソードは何度も読み返した。いまでは日本でも文庫本になっているので、よかったらぜひ手にとっていただきたい（新潮文庫）。これほど現代のアメリカを、希望を持って眺め直せるテキストはほかにないから。

全米のシロウトの投稿によって成り立っている『ナショナル・ストーリー・プロジェクト』の序文で、「だれかがこの本を最初から最後まで読んで、一度も涙を流さず、一度も声を上げて笑わないという事態は、私には想像しがたい」とオースターは書いているが、それは僕が『捨てられないTシャツ』の連載を通して、そしてこうやって

本にまとめるのに読み返しての実感とまったく一緒だ。

どちらも、こうしたアンソロジーにありがちな「ちょっといい話」ばかりが収められているわけではない。悲しい話もあれば、恐ろしい事件もあり、怒りに震えるできごともある。何度読んでも笑ってしまう話もあったが、何度読んでも涙ぐんでしまう話のほうが多かった。

「ファストファッションがストリートファッションを殺した」と言われるこの時代にあって、アパレル業界が長く沈滞しているのはご存じのとおり。ここに登場する70枚のTシャツのうちでは、いかにもなブランドものも、あからさまな安物も少数派だ。見るからにかっこいいTシャツよりも、「なんじゃこりゃ?」なTシャツのほうがずっと多い。

でも、ふつうだったら「何度か着て捨てられる」下着でしかないはずのTシャツに、これだけの思いが、ときに染みつき、かけがえのない自分の一部になりうること。ふと手に取った文庫本で出会った一行や、漫画のひとコマ、ラジオから流れてきた歌のフレーズが人生を変えてしまったり、人生を支えてくれたり、忘れていた記憶へのリブート・スイッチになりうる。そのように、こころに働いてくれる衣服もあるのだと確認できたのが、すごくうれしい。

ほとんどすべてのファッションは、製品になったときが完成形だ。どんなデザイナーの、どんな値段の服を着ているかで、ひとは判断される。着る人間によって、服のデザイン自体がかっこよく、かっこわるくなったりすることは、おおむねあり得ない。かっこよかったり、かっこわるかったりするのは、服ではなく人間のほうだから。

Tシャツだけはちがう。居酒屋で飲んでいて、となりに「島人（しまんちゅ）」なんてデカデカと書かれた色褪せTシャツ着用オヤジが座ったとする。あ〜めんどくさそうと思うが、そのうち言葉を交わすようになって、オヤジがぼそぼそ語ってくれる人生劇場にすっかり魅せられて、ちょっと涙ぐんだりしているうちに、ダサいはずのTシャツまでかっこよく見えてくる——そういう体験が、君にもないだろうか。

いまから50年くらい前の西部劇に『プロフェッショナル』というのがあって、別に映画史に残る名作でもなんでもないが、主人公のひとりであるリー・マーヴィンに、こんな決め台詞があった——「少年を男にしてくれる女もいれば、男を少年にしてしまう女もいる」（男女を入れ替えてもらってもかまわない）。その台詞を借りれば男を少年に、女を少女にしてしまうのがTシャツなのかもしれない。

都築響一